

武蔵野日曜集会 祈祷会

自由を得ません為に

――ガラテヤ書第5章――

1975年8月17日 (武蔵野)

小池辰雄

本当の自由 律法が御霊が 御霊により信仰により 十字架の顛蹟 愛にはたらく自由 祈り

【ガラテヤ5】

1 キリストは自由を得ません為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の轡に繋がるな。

2 視よ我パウロ汝らに言う、もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。3 又さらに凡て割礼を受くる人に証す、かれは律法の全体を行うべき負債あり。4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れたるより墮ちたり。5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるることを待てるなり。6 キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。7 なんじら前には善く走りたるに、誰が汝らの真理に従うを阻みしか。8 斯る勸は汝らを召したもう者より出づるにあらず。9 少しのパン種は粉の團塊をみな膨れしむ。10 われ汝らに就きては、その聊かも異念を懐かぬことを主によりて信す。されど汝らを擾す者は、誰にもあれ、審判を受けん。11 兄弟よ、我もし今も割礼を宣べ伝えば、何ぞなお迫害せられんや。もし然せば十字架の顛蹟も止みしならん。12 願くは汝らを乱す者どもの自己を不具にせんことを。

13 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反つて愛をもて互いに事えよ。14 それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。15 心せよ、若し互いに咬み食わば相共に亡されん。

16 我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。17 肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相戻ればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん為なり。18 汝等もし御霊に導かれなば、律法の下にあらず。19 それ肉の行為はあらわなり。即ち淫行・汚穢・好色・偶像崇拜・呪術・怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒党・分離・異端・猜忌・醉酒・宴樂などの如し。我すでに警めたるごとく、今また警む。斯



ることを行う者は神の国を嗣ぐことなし。²²然れど御霊の果は愛・喜悅・平和、寛容・仁慈・善良、忠信・²³柔和・節制なり。斯るものを禁ずる律法はあらず。²⁴キリスト・イエスに属する者は肉とともに其の情と慾とを十字架につけた

り。²⁵もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。²⁶互いに挑み、互いに妬みて、虚しき誉を求むることを為な。

● 本当の自由

ガラテヤ書は、ご承知のとおり、パウロがガラテヤ地方に伝道して、福音をせっかく伝えただけでも、またユダヤ教のためによりが戻ってしまった。そこで、これをまたもう一遍、よりの戻し返しをするために書いたので、パウロにとっては非常に福音の戦闘的な書簡です。

「キリストは自由を得ません為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の轡に繋がるな。」

「奴隷」というのは、もちろん、律法の奴隷です。パウロ自身が律法の奴隷になっていた。しかし、そのことを彼は知らなかった。非常に律法を重んじて、金科玉条にしているけれども、実はそれは律法の奴隷であったことに、キリストにひっくり返されてから分かった。キリストにひっくり返されて、キリストの僕となったことが本当の自由である。これはルターの『キリスト者の自由』にもそのことをルターは徹底的にパウロの精神で言っているわけです。だから、

「キリストに在る」

ということが最も自由であるということです。キリストにとらわれて、

「自分はキリストの囚人である」

と彼自身が言っている。

「キリストの囚人であることが実は、人間が一般的に言っている自由よりもはるかに素晴らしい自由だ」

と。このことは本当に福音の世界に來なければ分らない。みんなそれに躓くわけです。キリスト教に入ったら、何かいゆる自由思想がなくなってしまうて、固く閉じ込められるような気持ちをもつけれども、そういうことは決して然らずで、人間が自由なんて考えているのは実は、勝手気ままの自我にとらわれたら、今度は奴隷なんです。生まれつきの人間が自由と言う世界は、実はこの自我にとらわれている奴隷なんです。自我にとらわれていることを自由と思い違いをしているわけです。

ところが、

「キリストにとらわれ、神にとらわれていることは逆に本当に自由である」



と。これが福音の自由です。ですから、

「キリストは自由を得させん為に我らを釈とき放ちたまえり」

というのはもうひとつ言い換えると、

「キリストは自由を得させんがために、我らを縛しばりたまえり」

と、全く逆説的に言ってもいい。

「キリストに縛られることは、実は自由を得ること。そして、本当のキリストにおける自由になる」

ということです。キリストにおける自由とは律法に対して自由だということ。キリストは律法を満たしましたから。根本的に律法を満たしたから、もう律法に縛られることがない。だから、「キリストを受けとる」ことが本当の自由になる。そして逆に、律法に対して自主のものとなりますから、この福音の角度から律法を全うすることができる。いわゆる「律法を満たす」ことができる。自由というのはそういう意味における自由ですから。

「自由を得させんために我らを解き放ちたまえり」

とはちよつと妙な言い方ですけども、

「我らに自由を与えて我らを解き放した」

ということです。

● 律法か御霊か

然れば堅く立ちて再び奴隷くびきの軛つなに繋がるな。

具体的にいうと、

「再びユダヤ教に返るな」

ということです。原始福音の人たちが今、イスラエルでかなり密接な関係を持っていますけれども、あのユダヤ人たちは、いわゆる保守的な律法主義者ではないけれども、やはり何といつても福音をまともに受けておられないから、その点においてどうしても割り切れないものがあるはずなんです。

² 視よ我パウロ汝らに言う、もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。

この割礼は即ちユダヤ教に対する忠実のひとつの印ですから、ちようど、キリスト者としての忠実の印として洗礼を受けるのと同じことです。そうしたらば、

「キリストは汝らに益なし」

と。即ち、割礼を受けることによって律法に縛られますから、そうすると、キリストは全然無用なことになってしまう。

³ 又さらに凡て割礼を受くる人に証あかしす、かれは律法の全体を行うべき負債おいめあり。

もし割礼を重んずるならば、その印として具体的に律法をしつかりと守らなくてはいかん。



「律法の全体を行うべき負債あり」

というんだから、とてもやりきれた話ではない。パウロはもちろんユダヤ教時代には割礼を受けてます。しかし、そのことは、キリストにぶつかってからは、もう全然逆に益なきことになった。

4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れた^{めぐみ}り、恩恵より墮ちたり。

自分が前に律法によつて義とされることを思っていた。自分でもつて義となると思っていたところが、とんでもない間違いだったということが、キリストに電撃されて分かった。それはキリストから離れることになる。何のためにイエスは来たか。律法に縛られるところから解放されるためであると。

日本人も「道徳、道徳」と言っていたけれども、この道徳がダメなもので、今は道徳を捨ててしまった。捨てて、本当に福音の世界に入ればいいんだけど。福音に入らないで、道徳を捨てたら、なおさらこの道徳があるときよりか悪くなる。今は教育で全然、道徳をしていないというわけではありませんけれども、どうもそういう角度が多いですね。

いつも言っているとおり、電車の中で見ていると、すぐ分かる。道徳というものをなぜ実践しないか、実践しようとしませんか。そういうことが非常に希薄になってしまった。

●御霊により信仰により

5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいただき、義とせらるることを待てるなり。

「御霊により、信仰により」

という書き方をしているのがおもしろい。「御霊による、キリストの霊による」ということは即ち――「霊と肉」という――「肉によらない」ことです。肉というのは自我です。自我中心の生き方にしないで、キリスト中心の生き方になることが、この「御霊により」ということです。これも聖霊のバプテスマを受けなければ、「御霊により」なんて言われても、実は分からない。この御霊が入ってくると、この御霊は力あるもので、律法に対して自由なものですから、

「信仰によりて希望をいただき」

という。「御霊により」ということは神・キリストの側を主体として言った角度です。「信仰により」というのはこちら側を主体として言った場合です。「御霊により」ということと「信仰により」ということは、パウロにとっては実は一つのことなんです。ただ、この「御霊により」を先に言ったのは非常に大事なことで、御霊を受ければもう、「信仰により」なんと言わなくなつて、分かりきつた話なんです。

「義とせらるることを待てるなり」



と。我々は既に義とされている。信仰によって義とされている。

けれども、それは信仰的現実としての義であって、本当に生^なまの義とせられるのは、義の実力をあらわすのは、やはりこの地上の生涯を終わってからです。義はもちろんいただいているんですし、ある程度はもちろんそこで実行もできているんだけれども、本当の意味において義とせられるということは、我々が終末の世界でそれを待っているわけです。

6 キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ

愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。

これは大事な言葉です。「キリスト・イエスに在りては」、もうキリスト・イエスと一緒になっているところでは、割礼を受けたとか受けなかったか、そんなことはどうでもいいんだと。だから、

「キリストにあれば教会で洗礼を受けたか受けなかったかは、それはどうでもいい」ということです。本当の洗礼は御霊の洗礼ですから。

「ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり」

という。「信仰の使徒」とパウロは言われても、パウロにとつては信仰と愛とがまた離れない。キリストを本当に信じ受けとれば、そこには愛がこぼれて来ざるをえない。愛の行動が展開せざるをえない。それがもし展開しないとするならば、その信仰は観念になるわけです。信仰が本当の信仰ならば、どうしてもこれは愛によって働くことになる。だから、「愛によって働く信仰」という表現は、信仰の部分的判断ではないので、信仰の全体判断で、信仰は必ず愛によって働くものなんです。

●十字架の顛蹟

7 なんじら前^{まへ}には善く走りたるに、誰が汝らの真理に従うを阻^{はば}みしか。

「善く走った」というのは、マラソンのようにじつくりとコンスタントに動いていた。けれども、その真理に従うことをこぼんだ。誰がそんな横やりを入れたかと。

8 斯^する勸^{すす}めは汝らを召したもう者より出づるにあらず。

それはもう本当にそうです。

9 少しのパン種は粉の團塊^{かたまり}をみな膨^{ふく}れしむ。

悪いパン種があると、始めはいいと思ってもダメになってしまう。

10 われ汝らに就きては、その聊^{ちよ}かも異念^{いだ}を懐^{いだ}かぬことを主によりて信ず。さ

れど汝らを擾^{みだ}す者は、誰にもあれ、審判^{さば}を受けん。

自分が伝えた福音の真理は、これは本当なんだから、もしこれから離れたらダメだ。また、それを妨げるものも、みんなこれは審判にあうんだと。

11 兄弟よ、我もし今も割礼を宣^のべ伝えば、何ぞなお迫害せられんや。

もし今も割礼を宣べ伝えていれば、迫害されることがないけれども、割礼を宣べないもの



だから、どうにも迫害にあうと。「割礼」と言うならば、十字架の割礼ですよ。そしたらば、本当に我々は聖別されているわけです。

もし然せば十字架の顛躓^{つまずき}も止^やみしならん。

十字架がなぜ躓きかというと、そのように割礼が――クリスチャンでいうと洗礼が――サムシングになっているから、そこで、それは十字架に躓いているはなしだという。パウロが十字架と言うと、どうしても言わなければならないのは、徹底的な「贖罪」と、そして、それによって「自由を得させる」ことです。罪からの解放ですから。罪のゆるしです。しかし、自由を得させる場はできたんだけど、本当の自由はどうしたら来たかという、聖霊によって来たわけです。

私たちは無教会にいたときには、十字架の信仰が即、何か自由のように考えていた。けれども、それは十字架を受けとることによって自我からすつ飛ばされていますから、そこは自由の可能性ある現実です。しかし、自由の現実はどうしても聖霊を受けなければ来ないんです。そのところが、すぐ十字架から直ちに即自由になってしまうようなのが、実は今までの無教会です。

11 兄弟よ、我もし今も割礼を宣べ伝え、何ぞなお迫害せられんや。もし然せば十字架の顛躓^{つまずき}も止^やみしならん。

もし然せば十字架の顛躓も止んだらう。けれども、私はそうでないから、迫害はされるし、それから十字架の躓きが止まない。十字架は躓きですからね。

12 願くは汝らを乱す者どもの自己^{みずから}を不具にせんことを。

せつかく福音を受けとって、もう割礼は問題でないのに、

「割礼はなくてはいかん」

と言って福音に水をさす者、福音を乱す者はみずからをかたわにしたらいだらうと。割礼によって男性のものに傷をつけることをいうんですから、そういう言い方をする。

●愛にはたらく自由

13 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。

キリストによって「律法からの自由」。それからもう一つありますよ、「御霊における自由」というのが。律法からの自由は十字架で来ましたが、その自由がまだ積極的ではない。本当に自由が積極的であるのは、御霊によって自由が積極的になる。御霊によって積極的になった自由は愛に働く。だから、

「愛によってはたらく信仰のみ益あり」

というのがそのことなんです。それが本当の信仰です。

ただ其の自由を肉に従う機会^{おき}となさず、

ということは、自己中心な歩き方をもしその自由とするならば、それは逆戻りです。そして、



それは逆に今度は律法に審かれる。逆に律法に審かれてしまう。律法が権威をもつことになってしまう。しかし、律法が権威をもたないのは、既に律法を満たしたキリストの義をいただくことによって律法に対して支配的になるから、そこで本当に自由になる。その自由は愛にはたらく。

「律法の全きは愛なり」

と言うでしょ。律法の最高のものは、終点となるものは愛ですから。その愛にはたらく自由が在るところに、律法に対して全くこれが自由である。律法を支配している。また、律法を満たすということになる。

反^{かえ}って愛をもて互いに事^{つか}えよ。

それは互いに仕えざるをえない。

¹⁴それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。

これをまた間違えては困る。おのれを愛することを肯定しているのではない。おのれを愛することは人間の本能です。人間の本能であるようなその力強さを――ところが、おのれを愛するという本能はどうにもならんから、

「ああ、われ悩める人なるかな」

とパウロが言った――そのような強いものを逆用して、

「汝の隣りを愛すべし」

と言う。「汝の隣りを愛す」というのは、

「己を捨てる」

ということです。これはキリストがやったんだ。

「兄弟のために己の生命を棄つる。これより大いなる愛はなし」

と言う。棄ててかかる。もう一つ言い換えると、「汝の隣りを愛する」というのは、汝の隣りの中に自分を入れて、そしてこれを担ってしまう。これを福音に化してしまう。「愛する」というのは、相手を福音化することです。相手を福音化すること、これが「己の隣りを愛すべし」ということ。福音を化体させることです。

¹⁵心せよ、若し互いに咬^かみ食^{くら}わば相共に亡^なされん。

これはもう、パリサイ根性また宗教戦争みたいなものはみんな、

「相共に咬み食う」

方です。そうしたら、どっちもダメになる。これはパウロがキリストを、十字架を受けとって、聖霊をいただいて、本当に自由になった。そこから出てくるパウロの福音の構造というものは、この手紙に縦横無尽に表れている。だから素晴らしい。ただ「ワッショイ、ワッショイ」ではない。それが本当に重厚な構造でもって展開していく。そこにパウロがいかに健全であるかということを見るわけです。



そういう意味において、自由ということは罪からの、自我からの自由。それは十字架であつて、それから隣人愛へと展開するところの自由です。これが聖霊の世界です。自由はそういう二面を持っていますから。律法に対して勝利したということは、同時に今度は逆に、律法の全きであるところの愛の実力が展開していく。その中心が御霊なんです。だから、

「我らは御霊により信仰によりて」

という5節にあるようなところがそうです。このガラテヤ書5章5節とローマ書5章5節とはなかなか面白いです。あれは聖霊の愛のことを語っていますから。まあ、大体そういうことです。はい、おしまい。

● 祈り

主さま、このパウロがあなたにひっくり返されて受けとったところの深遠なる福音の世界は、とうてい我々は言葉をもって言い尽くすことができません。そしてまた、この福音の世界がいかに現代の神なき事態とあまりにも世界が違うことをしみじみとします。どうぞ、主さま、私たちはこのようにして福音の証者とされたからには、これからいろいろな艱難があり、あるときは迫害があるかもしれません。どのようなことにでつくわしましても、あなたの福音はいかに力強い福音であるか。私たちは絶対に負けません。そのような勝利をパウロはローマ書8章で絶叫していますが、どうぞ、この主イエス・キリストの十字架の愛が、また聖霊の愛が、いかに私たちを本当に豊かなものにし、また力強いものにし、またこのように天国を展開するところのただ一つの道であることを、いよいよ身をもつて証していくことができますように。

我々が本当にその意味においていよいよあなたの中に祈りこみ、そして、驚くべき霊的な火の玉のごとく、神さま、いよいよ全存在をもの凄いの、そこらの炭の火のところではない、驚くべきあなたの霊の火として、私たちの存在をいよいよあなたが力強くなしてください、切に願いたてまつります。そのことの成ることを信じ感謝いたします。

「ここがいい」という世界はありません。いよいよ力より力へと、また光より光へと、愛より愛へと、本当の重厚なる宇宙的な――私たちはミクロコスモスでありながら、本当にマクロコスモスを投影しているような――驚くべきことが主イエス・キリストにあつて展開することを信じて感謝いたします。兄弟姉妹たちと共にこの偉大な福音を、何ものをもつても奪われることのないことを、いよいよ相携えて鹿沢集会において、パウロを通してのつびきならない事態を一人びとりが十全に受けとつていくことが出来ますように切に願います。今、兄弟姉妹たちが鹿沢集会の準備とまた僕の『無者キリスト』のために主にある友情をもつて尽くしてくれておりますが、どうぞ、兄弟姉妹たちをいよいよあなたの御恵みをもつて祝福してくださいように切に願います。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれ共に御名により捧げ奉る。アーメン。

